

料紙装飾と作り絵の技法研究

—「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」祖本の想定復元制作を通して—

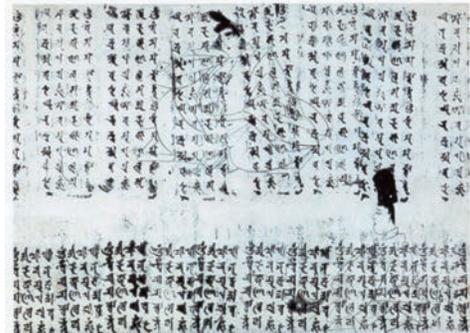
鈴木 七実（東京藝術大学大学院）

1. 研究概要

『伊勢物語』は10世紀から11世紀初頭にかけて段階を経て形成された物語文学である。本文成立後早くに絵画化も行われていたと考えられている。

現存最古の伊勢物語絵は鎌倉時代（13世紀）制作「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」（以降「白描本」と呼ぶ）で、「白描本」は平安時代に作られた伊勢物語絵（以降祖本と呼ぶ）の転写本であると指摘されている。

本研究では、転写本という前提のもとで「白描本」の図様を読み解き直し、線描を精査・整理しながら祖本の姿を浮かび上がらせた。そして、周辺作品の調査と各工程の技法実験を重ね、想定復元作品を制作し祖本の姿を視覚的に提示した。



〔図1〕「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」断簡

鎌倉時代、東京藝術大学蔵

画像出典：『伊勢物語の世界』五島美術館、1994年

2. 「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」

(1) 基本情報

「白描本」は鎌倉時代制作と推定される。紙本に描かれた白描絵だが、光明真言の梵字経が表裏両面から刷られており、図様は大変見づらい状態にある〔図1〕。

「白描本」については、団家所蔵の一卷および二枚と東京美術学校の断簡一枚、田中勘兵衛氏旧蔵の断簡一枚に関する論考を田中一松氏が発表したのが初めて、戦後に白畑よし氏が新たに益田家の一卷も含めた調査を行った。白畑氏による論考の発表により現存する「白描本」の大半がほぼ明らかになったと言われている。「白描本」はその後解体されて現在は二十あまりの断簡として美術館や個人などで分蔵されているが、所蔵先未詳の断簡もある。

先行研究で、片桐洋一氏によって詞書が定家本以前の本文に拠っていることや、伊藤敏子氏によって図様も平安時代末ごろの特徴が認められることなどが指摘されたことで、「白描本」には依拠した祖本の存在があったことが明らかになってきた。その後、池田忍氏が転写元である祖本に焦点を当てた研究を行い、「白描本」の各図様と12世紀から13世紀にかけての物語絵に類する作例を、画面構成を中心に比較した。また、池田氏は「白描本」に薄墨が多用されていることにも注目し、祖本を彩色本と推定した。

(2) 上げ写しと熟覧調査

筆者は先行研究での指摘を踏まえ、「白描本」の図様をもとに祖本の姿を想定復元することが可能であると考えた。まず、図様を把握するために上げ写しを行った。梵字が刷られる前の作品の状態を確認するため、図様のみを抽出した¹。上げ写し後には、原本断簡の熟覧調査を行った。「白描本」は大きく分けて、顔貌や袖口など細部の表現に鎌倉時代、構図や画面構成など絵の骨組みにあたる箇所には平安時代の特徴が強く表れていることがわかった。また、国宝「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館蔵)と近似する図像が複数あることを発見した。さらに、祖本が彩色本であったことを示す痕跡と思われる表現を見つけ出すことができた。

「白描本」の本紙サイズや余白の取り方、大小関係などを周辺作品と比較し、筆者は祖本の制作年代を「扇面法華経冊子」(四天王寺・東京国立博物館蔵)に近い1150～1160年頃と推定した。

3. 周辺作品の調査と試作

(1) 祖本の表現手法

「白描本」は戸外景の場面が多く余白の割合が非常に高い作品である。よってこの余白(空間・奥行き)をどのように扱うかによって作品の印象が大きく変化する。

平安時代制作の「扇面法華経冊子」と「寢覚物語絵巻」(大和文華館蔵)は屋外の表現に特に優れた作品として知られ、両者は料紙に雲母地塗りや箔装飾を行っているという点で共通している。また、「白描絵料紙金光明経」(東京国立博物館・京都国立博物館・逸翁美術館・根津美術館蔵)、および「白描絵料紙理趣経」(大東急記念文庫蔵)(以降、「目無経」と呼ぶ)、「葉月物語絵巻」(徳川美術館蔵)等は本紙表面に箔装飾はないものの、雲母地塗りあるいは雲母砂子が施されている。このように、平安時代の作り絵の物語絵は、徳川・五島本「源氏物語絵巻」のような画面全体を濃彩で塗り込めて余白をほとんど残さない描き方ばかりではなく、料紙装飾を活かした表現も用いられていたことは注目される事実である。

「白描本」には薄墨が多用されているが、その薄墨を彩色に置き換えた場合、「扇面法華経冊子」や「久能寺経」(東京国立博物館蔵)見返しのような薄塗りの画面になると予想される。また、余白の大きさから、料紙には何らかの装飾加工が施されていたと考えるのが自然である。筆者は、「白描本」の依拠した祖本を装飾料紙に描かれた作り絵であると仮定して想定復元に臨むことにした。

(2) 熟覧調査

想定復元を行うために、祖本の周辺作品である「目無経」と「寢覚物語絵巻」を調査した。「目無経」は下絵の状態に残されており、物語絵の制作過程を明らかにする上で重要な作品である。今回の調査では、雲母の粒子の大きさや、塗り厚の観察を中心に行った。雲母が紙面に密着している様子や、素地に対して地塗りが白く見えることを確認した。「寢覚物語絵巻」は現存する平安時代の物語絵巻の中で作り絵と料紙装飾が併用されている唯一の作品である。主に雲母地塗りや箔装飾、彩

1 上げ写しを行ったのは以下の断簡である。初段「春日の里」①/初段「春日の里」②/四段「西の対」/九段「八橋」/九段「宇津山」/二十三段「筒井筒」/二十三段「河内越」/二十七段「水鏡」①/二十七段「水鏡」②/六十五段「恋せじの袂」①/六十五段「恋せじの袂」③/章段不明
大和文華館・逸翁美術館・東京藝術大学美術館所蔵の断簡は、各美術館から画像データをお借りした。また、上げ写しは先行研究でも行われている。これまでに上げ写し図の制作をしているのは、中村岳陵氏、三井田久子氏、岩間香氏、小滝雅道氏、野村渚氏の五人である。

色の塗り状況を観察した。絵具が剥落し、素地が見えている箇所では下描き線が確認されなかったため、下描き線は地塗り層の上に引かれていたことがわかった。また、箔装飾が図様を避けるように撒かれている箇所（部分的な箔の撒き分け）があったことから、「寢覚物語絵巻」は雲母地塗り⇒透き写し⇒銀泥⇒箔装飾⇒彩色⇒描き起こし、の順で制作されていることが予想された。これは、「扇面法華経冊子」の雲母地塗り⇒箔装飾⇒透き写し⇒彩色⇒描き起こし、とは異なっている。

（3）料紙の制作

料紙制作には、打紙、地塗り、箔装飾、の三つの工程がある。想定復元制作前に各工程を試した。また「扇面法華経冊子」と「寢覚物語絵巻」を模して彩色前まで工程を進めたサンプル料紙を作り、両者を比較した。「白描本」の図様には箔の撒き分けが適さない場面もあるため、「扇面法華経冊子」のような図様に関係なく装飾が施される手法の方が適していると感じた。

4. 想定復元制作

（1）復元案

想定復元制作では、まず透き写しのための図案（下図）を作った²。①「白描本」の写し崩れした箇所の線描整理と、引き目鉤鼻など祖本の周辺作品に近い表現への変更、②透き写し用の下図の作製、③線描イメージの確認、の順に行った。その後、配色と文様についても、有職故実を踏まえつつ周辺作品を参考にしながら場面ごとに決めていき、彩色案として可視化していった。

（2）本紙の加工

試作をもとに本画用の本紙を加工した。湿らせた本美濃紙九匁を御影石の上に十八枚重ね牛皮を被せて、五時間ほど、重ねの外側と内側を入れ替えながら打ち [図2]、状態の良い十二枚を選んで乾かした。雲母と少量の白土³を団子状になるまで膠で練り、布海苔液で溶いて本紙に一回塗布した。二回目は雲母と白土を布海苔液のみで溶き、一回目と同様に塗布した。完全に乾かしてから再度本紙裏側から湿りを入れ、重ねた状態で二時間ほど置いた。その後七時間ほど打ち、打紙と地塗りの工程は終了とした。



【図2】 打紙



【図3】 箔装飾

-
- 2 想定復元場面は、上げ写しと熟覧調査をすることができた断簡の中で、詞書があり、章段と絵が確実に一致する、初段「春日の里」、四段「西の対」、九段「宇都山」、二十三段「筒井筒」、二十七段「水鏡」を選んだ。
 - 3 地塗りは「目無経」の紙面を参考にして行った。試作の段階で、半透明の絵具である雲母のみを紙面に塗布したところ「目無経」に比べ白さが足りなかった。そこで雲母に少量の白土を混ぜたところ近い印象になることがわかった。

箔装飾は、焼き合わせた箔を小切や野毛などに加工した。箔を用意した上で、布海苔を紙面にたっぷり塗布し、湿りが乾かないうちに全ての箔を撒ききった [図3]。乾かしてから薄めたドーサを本紙の表側だけに塗布し、後日仮張りに張り込んだ。

(3) 下図の透き写しと着彩

装飾料紙に下図の線描を透き写しした [図4]。墨の濃さを柱や長押はやや濃く、人物は少し薄く、樹木や岩は彩色後に描き起こしをほぼ行わないため濃くするなど対象ごとに調節した。

その後、彩色に進んだ。画面の中で大きな面積を占めている床板や柱など建造物から塗っていき、畳、そのあと衣服、土坡、樹木や岩、御簾、霞と続けた [図5]。染料系の絵具を画面全体に回してから（必要箇所に通り塗ってから）岩絵具や無機顔料を塗って詰めていくという手順を進めると、画面が破綻するという段階が無く、スムーズだった。

彩色まで終えた想定復元作品は、詞書と切継ぎ、卷子装に仕立てた⁴。



[図4] 下図を透き写しする様子



[図5] 彩色過程

5. 総括

本研究では、上げ写しから想定復元までを一貫して自身の手で行い、実践を通じて対象に迫るといった手法をとった。平安時代の絵画は作品そのものだけでなく、当時の制作環境や技法材料に関して知ることができる資料も少ない。筆者は、従来の研究で深く追求されずにいた“どのようにして作ったか”という推測部分について周辺作品の調査を行い、工程ごとに試作を重ねることで実技的な面から答えを出していった。祖本を装飾料紙に描かれた作り絵であると仮定して想定復元を行った結果、余白が空間として成立し、屋外の場面では特にゆったりとした印象を与える画面を作ることができた [図6～11]。これは、画面全体に絵具を隅々まで塗り込める方法では生み出せなかった結果であるといえるだろう。

4 初段と四段は「白描本」の詞書が失われている。現存する「白描本」の詞書本文は広本系伝本に比較的近いことが片桐氏によって指摘されているため、初段と四段の詞書には阿波国文庫旧蔵本の本文を当てることにした。一行あたりの文字数や行間の取り方などは現存する「白描本」の詞書と、徳川・五島本「源氏物語絵巻」「寝覚物語絵巻」を参考にした。また、字母や仮名遣いは「白描本」から、書風は「伴大納言絵巻」(出光美術館蔵)の詞書を参考にすることにした。本紙は「寝覚物語絵巻」と同様に香染め(丁子染め)とし、絵と並んだ時に地色の差がはっきり出るように染めた。



[図 6] 想定復元作品全体



[図 7] 想定復元作品部分 (初段 絵)



[図 8] 想定復元作品部分 (四段 絵)



[図 10] 想定復元作品部分 (二十三段 絵)



[図 9] 想定復元作品部分 (九段 絵)



[図 11] 想定復元作品部分 (二十七段 絵)

主要参考文献

- 白畑よし「伊勢物語下絵梵字経考」『美術研究』147号、1948年
 片桐洋一「梵字経刷白描伊勢物語絵巻の本文」『大和文華』53号、大和文華館、1970年
 秋山光和・柳澤孝・鈴木敬三『扇面法華経』鹿島研究所、1972年
 増田勝彦・大川昭典「製紙に関する古代技術の研究(II) - 打紙に関する研究 -」『保存科学第22号』1979年
 田口榮一「白描伊勢物語絵巻料紙梵字陀羅尼経断簡」『東京藝術大学蔵品図録 絵画I』東京藝術大学、1980年
 伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店、1984年
 田中一松「白描下絵梵字経について」『田中一松絵画史論集 上巻』中央公論美術出版、1985年
 池田忍『白描伊勢物語絵巻』とその系譜的位置』『美術史』121号、1987年
 江上綾『日本の美術 第397号 料紙装飾 箔散らし』至文堂、1999年
 羽衣国際大学日本文化研究所『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇・資料篇』角川学芸出版、2007年